

経営学科

石川 弘道 先生



——先生は経営システムや情報システムを研究していらっしゃるとお聞きしました。それはいったいどのようなものなのでしょう？

石川 私の主たる研究対象は経営情報システムと呼ばれるものですが、そう言うだけでは分らないでしょう。そう思ったので今日は私が出版した本を三冊用意してきました。『情報活用空間の探求』（中央経済社、1997年）、『経営情報の共有と活用』（中央経済社、2001年）、『経営情報の活用モデル』（中央経済社、2002年）、これら三冊を並べてみると何が分かりますか？ 何が共通している？

——ええと、「情報」が大切だってことがわかります。

石川 そうだね。他には？

——「活用」という言葉が共通して出てきていますね。

石川 三つの本に共通しているのは「情報」と「活用」という単語。つまり、「情報の活用」がメインテーマだということです。更に、「経営」という言葉が三冊のうちの二冊に使われている。ここから「情報」といっても、経営に関わる情報を扱っていることがわかんと思います。『経営情報の活用モデル』では、そうした情報を扱う際のモデルを研究しています。これは私の研究のスタートになったテーマなんですね。その隣の『経営情報の共有と活用』では、「活用」に並んで「共有」という言葉が出てくる。せっかく集めた情報も、誰か一人しか理解できないのであれば独りよがりの考え方しか生み出せません。だから情報は複数人で理解できるものにしなければならない。これがここに言う「共有」の意味なんです。最後、「情報活用空間」ですけど、「情報システム」というと皆さんはコンピューターを使ってやるものだと考えるでしょう。でも、情報を扱う空間はすべて「情報システム」と捉えられるんです。組織だって、職場だってそうです。だから、情報を活かすためには、実際に情報が使われる経営という場そのものを考えなければならない。そ

情報は複数人で 理解できるものに しなけければならない

いうことを考えて、そうした場を「情報活用空間」と名付け、研究してみたんですね。

——先生は理工学部出身とかがいましたが、どうして経営情報の分野を大学で専攻されたのですか？

石川 もともと物理をやろうと思っていたんです。でも、どうも自分には合わないなと感じて、他の学科のことを調べ始めたんですね。その時、経営システム工学——当時は「工業経営」と呼ばれていましたが——という分野を見つけて、理系と文系の要素を合わせ持っているところに興味をもちました。あの頃は高校の先生も知らないような学科でしたけど、そこもまたおもしろそうだ、と。

で、入ってからは今度は何をしようかと考えたんですが、その時に思いついたのがその学科で一番若い先生のところに行ってみようってことでした。一番若いから一番活発だろう、と(笑)。そうしたらその一番若い先生は、市場調査、今で言うマーケティング・リサーチをやっていた。それが私自身の研究の第一歩になったわけです。

——今のお話は進路選びで悩む私たちにとってたいへん有意義な情報です(笑)。

石川 今、私と同年代で情報システムを教えている方は基本的には会計学かもしれないし数学の出身者が多いです。この分野にはいろんな学部を出た人が集まっている。それがいいんです。多角的な意見が集められる。そうすると広がりが出て、分野が発展していくんです。文系と理系という言葉があるけれども、それらを全く別の分野などと捉えない方がいい。両方を混合したほうがいいんです。



どんな授業の中にも 必ずヒントがある

——でも、大学だとそもそも学部が分かれていて、文系と理系の考え方を共有できる機会というのはなかなかないようにも思えるのですが…。

石川 どんなことでもいいんですよ。たとえば文章を書くときだって、私はいつも学生にまずは書くべき内容を箇条書きにしてみろって言うんです。冒頭の書き出しをどうするかとか、そういうことを考える前に要素だけを並べてみる。これも理系的な情報処理のやり方ですね。更にはその要素を絵にしてみたり、図にしてみたり。そうするだけでも話の脱線や書き残しが減りますよ。

——先生はもう長く情報システム関係の研究をなさってきたわけですが、その間に情報の分野というのは本当に大きく変化したと思います。その変化の中でご自身の研究をどう位置づけられますか？

石川 確かに技術的な面ではがらりと変わってしまいました。でも、技術の面はそうでも、情報システムの本質の部分は変わっていないんですね。たとえば最初に説明した「情報の共有と活用」という考えはいつの時代でも変わらず重要なものです。

いまはパソコンがあるから複雑な計算を簡単に行うことができます。私が学生の頃は、コンピューターはパンチカード入力でしたから、自分で書いたプログラムをもとにして穴を開けたカードの分厚い束をもって、大きなコンピューターが置いてある大学の中のコンピューターセンターまで行き、「よろしくお願いします」と言ってカードの束を渡す。すると、翌日ぐらいにプログラムの計算結果が出力される、そんな感じです。カードの穴の開け方を間違えていたりすると、翌日にそれが分かって最初からやり直し(笑)。大変なんです。

でも、だからこそどういうデータをどう計算するべきかを真剣に考えたわけですね。いまは簡単に計算できるから、たとえば学会で論文の審査をしていても、ある数値データを計算してみたらこんな結果が出ましたというだけで、その計算に何



の意味があるのか分からないような論文に出会ったりします。数値データだからといって必ずしも数量的なデータであるとは限りませんし、記号として使われる数字もありますよね。大切なのは数字の意味を考えることであり、それはいつの時代も変わらないでしょう。

——最後に学生へのメッセージをいただけますか。

石川 りんごが落ちるのを見たって、ふつうは万有引力なんてことは考えないじゃないですか。ニュートンは常に問題意識を持っていたわけです。だからりんごが落ちるのを見て、「なんで落ちるんだ？」と考えることができた。何も考えていなかったら、落ちたりんごを拾って食べるだけです。大学の授業をつまらないと言う学生がいるけれど、それも同じことなんです。大学の四年間でこういうものが学びたいと思っていたら、授業90分のうちにそれに関わるヒントが必ず出てくるはずです。そう考えたら、無駄に過ごしていいことなんて何一つなくなるはずです。関心を広くしっかり持って、何でも受け止めてやろうというのが必要だと思いますよ。

石川弘道

高崎経済大学経済学部経営学科教授。

1947年生まれ。早稲田大学大学院理工学研究科博士課程修了。

1981年に講師として本学に就任。1991年より現職。